
電腦遊客

万墨人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

電脳遊客

【Nコード】

N0452Z

【作者名】

万墨人

【あらすじ】

仮想現実構築されたのは、江戸時代！そこには江戸町人、侍、商人などが生活し、現実世界からは？遊客？と呼ばれるプレイヤーが、江戸の暮らしを体験する。この江戸仮想現実を創設したメンバーの一人、鞍家二郎三郎は、悪党一味の動きを探るため、活動を開始したのだが……。

ちゃぷりと、微かな水音を立て、船頭の留吉とめきちが艀ろを動かした。きい……と、小さな軋み音に、留吉は全身で慄おのいて、俺を見た。

「二郎三郎の旦那……。どうしても、いらっしやる御つもりでござんすか？」

俺は無言で頷いた。むつつりと、俺が押し黙っているので、留吉は仕方なさそうに、ゆつくりと艀を動かし、船を進める。

若い。年の頃は、二十歳を多くは過ぎてはいまい。遅しい上半身に腹巻をして、下帯一丁で、月代は丁寧に剃り上げ、丁髷は片側に垂らした流行はやりの髪形をしている。

暗い。

星はあったが、空に月はなく、目の前はべつとりとした闇に覆われている。背後で、留吉がはあはあと荒い息を吐いているのが、はつきりと判る。

舟の舳先へさき辺りに蹲またがっている俺は、黒地に伊呂波いろは四十八文字が、白く抜かれている着流し姿で、頭は蓬髪にして丁髷を結った痩せ浪人姿だ。

俺の名前は鞍家くらかじ二郎三郎。ご想像通り、気楽な浪人である。ただし普通の浪人とは、ちょっと違いがあるが……。

ここは品川の、人里から少し離れた川辺の、葦原あしだ。人伝に耳にしたのは、この辺りではなぜか神隠しや、幽霊などの噂が絶えず、そのせいか昼間でも人氣が無く、閑散としている。ましてや真夜中だ。信じやすい人間にとっては、近づくのも恐ろしかろう。

何しろ、近くには鈴ヶ森刑場がある。従って、昼間でも近づく町

人はほとんどいない。

かさこそと、川舟の舳先に生い茂った葦が触れる音がしている。

「もそつと、右へ寄せろ……」

小声で命じると、留吉はびくりと身を震わせた。

「旦那……真つ暗闇でござんすよ。お見えになっっているんですかあ……？」

ああ、と俺は低く答えた。

今、俺の両目は、暗視モードにっていて、星空ほどの光でも、はつきりと周辺の様子は見て取れる。増幅された光に、葦の穂先が、ぬれぬれと光っているように見えている。密生した葦原の先に、向こう岸が見えて、荒れ果てた廃寺が、暗闇に立ちはだかっている。

背後の留吉が震える声で訴えた。

「旦那、よろしきうや！ 命あつての物種つて言うじゃありませんか……」

俺は小さく舌打ちをした。やはり、他人を頼むのではなかった。舟を漕ぐ技術は修得していなかったため、度胸自慢の留吉に頼んだのが間違이었다。留吉はすっかり、怯えきっている。普段から「俺には怖いものなど、何にもねえ！」と勇んでいたのに、それならと依頼したところ「任してください！」と胸を叩いたのだが、今になって、完全に恐怖に支配されている。

俺は船板に横たえていた両刀を掴むと、腰に手挟んだ。ぐいつ、と帯にこじ入れ、立ち上がる。俺の動きで、船が少し揺れた。

ただそれだけで、ひいつ……と、留吉が押し殺した悲鳴を上げる。
俺は振り向いて、留吉に命じた。

「一時間だけ、待っている。それで、俺が帰らなかったら、一人で
戻れ。あとは火盗改の榊原源五郎さかきげんごろうに話をすればいい。判るな？」

「一時間？ ああ、半刻のこつてすね。わ、判りました……」

俺たち現実世界の【遊客】プレイヤーは、どうしても江戸の時制に慣れてい
ない。江戸のNPCノン・プレイヤー・キャラクターたちは、俺たちと付き合ううち、俺たちの物の
言い方に、合わせてくれている。俺は仮想現実江戸創設者の一人だ
が、緊張していると、つい現実世界の物言いになる。

俺の視界に、留吉の丸い顔が背後からの遠くの町の灯火を背景に
黒々と見えている。

町の灯火は、俺の増幅された視界では、眩しいほどにぎらぎらと
光り輝いて見えていた。留吉は顔中から冷や汗を噴き出させ、その
ため皮膚がてらてらと光っていた。両目の瞳孔がぼっかりと開き、
小さく膝頭が震えている。

俺はぐつと留吉に近づくと、力を込めて言い聞かせる。

「いいか、お前はここでじっとしていればいいんだ！ 震えるな！
落ち着いてろ！」

俺の言葉に、留吉の震えがぴたりと止まった。俺のような本物の
仮想人格ベルシナだけが、留吉ら江戸のNPCノン・プレイヤー・キャラクターに対し、圧倒的な気迫能力を
発揮できる。

しかし、俺は滅多にこの能力を使おうとは思わない。

何と言っても、俺たち現実世界の【遊客】は、仮想現実の江戸に
生きるNPCたちに対し、絶対的優位に立っている。だから、気迫
を発揮して言いなりにするのは、極めて卑怯な気がするからだ。

俺は懷に手を入れ、小判を一枚取り出した。留吉の手を取り、握

らせる。

「帰ったら、同じだけ渡す」

手に握らせた小判の重みに、留吉の顔が綻んだ。手の平を上下に揺らし、重みを確かめ、急いで腹巻に押し込んだ。仮想現実の江戸では、貨幣価値が本物の江戸とは少し違うが、小判一枚あれば、留吉のような若者なら、三ヶ月は遊んで暮らせるだろう。

いそいそと川舟から岸に上がると、舳もやいを結わえ付ける場所を探す。「お前の目の前に、手ごろな岩が突き出ている。それに結わえ付けろ」

指示してやると、手探りで留吉は縄を結わえた。落ち着こうとするのか、腹巻から煙管を取り出し、火打石を擦ろうとするのを俺は慌てて止めた。

「よせ！ 見咎められたら、どうする」

びくつと、留吉の動きが止まる。俺はもう一度、言い聞かせた。

「いいな。動くなよ。俺が合図するまで、じっとしている！」

「へえ……」

弱々しく答え、留吉は蹲った。

俺はそれきり、留吉の存在を頭から追い払い、目の前の廃寺に向かつてそろりと歩き出した。

二

ゆっくりと俺は廃寺に近づき、両目の暗視モードを、赤外線に切り替えた。【遊客】のみが使える、一種の特殊能力だ。

超能力とは言いたくない。あれは不可知論の領域なのだが、俺たちの能力は、完全に科学で説明可能なのだ。

一瞬で、灰色の視界が、揺らめく紅蓮の炎に包まれた荒れ寺に変化した。昼間の熱が、寺の崩れかけた塀や、屋根の瓦から放射されているのが判別できた。ほとんどは、昼間の日差しの名残りだが、廃寺の奥からは、別の熱の放射が感知される。

門を見ると、幾人かの足跡が、熱の蟠り^{わだかま}を見せ、廃寺の正面に消えている。確実に、夜になって、誰かがこの場所に足を踏み入れている。それも一人ではない。

俺は、にやりと唇を歪め、他人からは「ハイエナの笑い」と呼ばれる表情を作った。そんなに俺の顔は悪どいのかと、俺は常々疑問に思っているが、他人の評価など、そんなものだ。

ぴたりと動きを止め、耳を澄ます。

途端に、それまで意識していなかった虫の音、葦が僅かな風に揺られ、掠れる音、遠くのざわめき、風の音がわっ、とばかりに、俺の耳に飛び込んでくる。感度を上げすぎたせいだ。

俺は意識操作で、俺にとって意味のない音をカットする？ カクテル・パーティー？ フィルターを起動させた。通常、聴取できない超低音——二十ヘルツ以下の超低周波に意識を集中させる。

思ってたとおりだ！

微かな律動音^{シグナル}が、地面の下から聞こえてくる。地面に耳を押し当てると、さらに律動音は、くっきりと聞き取れた。会心の笑みが浮かぶ。その時ばかりは、俺は、狼が獲物を前にした時の、涎がたらたら口の端から垂れそうな、凄みのある笑みを浮かべているはずだ。

じわじわと、俺の体温で、辺りが赤外線放射を見せ始めたので、俺は視界を通常より、やや感度を上げた、夜目に変えた。暗視モードほど、辺りははっきりと見てとれないが、うっかり星空を見上げると、星の光さえあまりに眩しすぎるので、このほうが都合がいい。俺は門を潜り、境内に足を踏み入れた。荒れ果てた庭に、覆い被さるような木々が鬱蒼と茂っている。湿気が強いのか、ぶん、と苔の匂いが籠もっていた。

慎重に、廃寺に近づいた。
足音は立てない。

俺は自分の仮想人格をデザインする際、感覚を研ぎ澄ませた、忍者のような性格を頭に入れて製作している。多少、通常のNPCに比べれば体力は上回り、苦痛に耐える上限も高めにしているが、見かけはぱつとしない、ただの男である。

他の【遊客】は、山のような筋肉の固まりか、あるいは女と見間違ふほどの優男、女なら、目の飛び出るような絢爛豪華な美女にするのだが、俺はほぼ、現実の自分と同じ見かけにしている。

よくからかわれる長い顔。大きな口。両目は細く、狡賢そうな表情をしている。どう見ても、水も滴るいい男、とは言いかねるが、なあに、それでも、俺は結構もてるのだ。

話が横道に逸れた。

俺は全身の神経を、ぴりぴりと緊張させ、一步一步、そこに爆弾が埋まっているかのように、足を下ろし、じわりと体重を乗せると次の一步を踏み出した。

廃寺の障子は開け広げになっている。俺は土足で踏み込むと、周囲を抜け目なく見渡した。

あの柱が怪しい。

他の柱が、雨風に打たれ、今にも折れそうな枯れ切った状態なのに対し、なぜか、俺の目のつけた柱だけは、つやつやと表面が黒光りしている。何人もの手が触り、手脂が表面を保護しているのだ。確認のため、一瞬赤外線モードにすると、柱の周りには、以前の足跡が熱の残滓を見せ、微かに光っている。

顔を押し付けるようにして、しげしげと見入る。目を精細モードにして、表面を拡大する。

あつた！

目に見えるか、見えないほどの、小さな合わせ目が見てとれた。俺は指先を近づけ、爪先を引っ掛けるようにして、ぐいと力を込めた。

呆気なく、ぱたりと表面が開き、十進キーが俺の目の前に顕わになる。確実に、暗証入力装置だ！ キーの下には、カードを挿入する細い隙間があった。

俺は懷から、かねて用意の開錠セットを取り出した。指先で薄い読取装置を掴むと、カード挿入口に押し込む。読取装置のディスプレイが忙しく瞬き、電子の指先が、目の前の暗証入力装置に隠された、開錠システムをまさぐる。

ぴーっ！ と、俺にとっては、一杯に膨らんだゴム風船が勢い良く破裂したほどの音が響き、暗証を探し当てたと読取装置が誇らしげに作業の終了を告げる。

溜息のような音が洩れ、寺の床板の一部が僅かに持ち上がった。あれが入口だ！

俺は屈みこみ、床板をゆっくりと押し開けた。歯ぎしりするほど、自分でも慎重な動きである。

落ち着け！ 落ち着け！

留吉に言い聞かせた台詞を、自分に呪文のように繰り返す。

開いた！

黒々と、地下への入口が、俺の目の前に現れた。階段がついてい

る。
俺は腰の大刀の鯉口を切り、いつでも抜き打ちできる構えを取って、地下への階段に足を載せた……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0452z/>

電腦遊客

2011年12月2日21時46分発行